

癌看護の記録

限りある生命
惜しんで

工藤良子

限りある生命 惜しんで

1963 年 4 月 20 日 1 版 1 刷 ©

著 者 く どう りょう こ 工 藤 良 子

発行者 株式 会社 医 学 書 院

取締役社長 金 原 一 郎

本 社 東 京 都 文 京 区 本 郷 6 ノ 20
811—1101 (代) 振替東京 96693

出張所 大 阪 市 北 区 中 之 島 常 安 町 27
特急印刷・中村製本

落丁乱丁などの不良品は直ちにお取替いたします

限りある生命 惜しんで

癌看護の記録

工藤良子

医学書院

癌にたおれた人々に捧ぐ

ふまれても 根づよくしのへ道草の
やがて花咲く春もきぬべし

「限りある生命、惜しんで」によせて

室　　生　　朝　　子

ここに集められた数々の手記は、看護の立場、また病人自身の立場、そして愁いの深い家族の心を、実によく表現し得ている。

私も父、室生犀星を肺癌で失って、満一年の月日が過ぎ去った。この中にある幾人かのように、父は最後はさほどの苦しみもなかったものの、傍にいる私達家族は、どれほどの憎しみを、この黒ずんだ恐ろしい病氣に対して抱いたか知れなかった。私は私の出来得る限りの嘘と芝居を十か月、毎日、それも一分一分の細かい神経を使い、父をだましとおして日を送った。暗い、時にはからりと晴れた日のような、父の様子は、夜になり私が自分の部屋に引き上げる時、それは睡眠の時だけ、心にもない嘘で、大切な父に対している苦痛から、私は救われていた。父の周囲の方達は、だまされていたのこそ私の方で、あれほどのこまかい神経の持主であり、そのうえ作家として七十年生きて来た男が、自分の病いの神経を知らぬはず

はないと言われもしたが、私は一年たって今も、私としての父に対する態度と芝居の生活に自信はある。はつきりと父は癌を知らずに、生を終ったと、言い切れるのである。私の経験で言えば、いかなる苦勞も嘘でかためた言葉でもよい。その病いの根本は、病人に知らせるべきでない。ありふれた言葉ではあるが、誰しも一日も多く生きたいし、生きる希いと望みは年を取り重ねても、僅かな時間とはいえ、頭の芯から離れるものではないのである。

この文集の中に何度も繰返し言われてはいるが、生活方法の総てが新しい時代に来てはいても、癌に対する絶対的な治療の方法は、未だ発見されてはいない。目を見はるほどの医学の進歩を、ひと粒の錠剤にでも私達は感じる時がありながら、人の手では処理出来ないほどの残忍な病状と恐怖にも近い病根の、いかにすまじいかを、私は父を看とり自分ではよく納得理解出来ていたつもりではあったが、第三者として身近い者でない立場にあっても、改めて慄然としたおそろしさに捕われたのであった。

癌センターの話もこの中に出て来るが、私も父を失って後、ラジオの仕事で訪ねたことがあった。それは一言でいいつくせるほど、設備のよい安心感のある処であった。これらのものが各都市に出来、私達の一人ひとり、自分の健康管理がある程度徹底しつつある今、例えば自分の誕生日に毎年健康診断を受ける、この習慣を各自が持つべきである。それによって、行ないやすいような事柄を、なお実行出来得る時、こわがってはいけない、だがこわい

病いの早期発見が出来るのである。と、院長は話されていた。日常の生活にかまけて自分の健康の自信から逃げている私の心に、その言葉は奥深く沈んでいった。各章にも随所に見られる早期発見ということにしか、今はこの病いに対して立ち向かえるものはない。これを読まれる方達は、きっと自分の乳房、肺、胃袋など、内臓の一個所一個所と、一問一答をしないではいられないであろう。とにかくこのひとつのことにおいても、一人でも多くの人がこの書を読まれ、再度病いのおそろしさと自分を大切にしなければならぬことに気がつくのではないであろうか。

昭和三十八年三月二十六日 犀星の命日に

次

6	5	4	3	2	1
母を求めて	学校に行ける日を待ちながら	祈りささげても	散りゆくはな	父親として	春を待たずに
――骨	――	――肺	――腹部腫瘍	――胃癌の症状	――胃癌とその家族関係
肉腫	骨肉腫	癌			
………	………	………	………	………	………
六二	呪	三	三	九	一

7	乳房を失いて	—— 乳癌の自己診察法	………	七三
8	土に生きる	—— 子宮癌症状	………	八五
9	琴の音	—— 上顎洞腫瘍	………	九七
10	迷い	—— 直腸癌	………	一〇五
11	ふるさとの人々	—— 食生活と癌	………	一二五
12	老婦人	—— 胃癌の早期発見	………	一二五
13	よろこび	—— 快癒した人びと	………	一三九

1

春を待たずに

— 胃癌とその家族関係 —



癌の早期発見、早期治療によって今日では癌はほとんど全部が完全に治るようになった。

.....

その新聞記事をくりかえし読みながら私は頭をかかえた。

というのは知人でまだ若い奥さんである澄子さんが死んでしまわれたからである。

胃癌だった。

幽門近くに癌の極めて初期である粘膜癌ができていて局所リンパ腺には一個の転移がみとめられただけで、手術は成功であったはずなのに、一年もたたない中に死んでしまった。

私は母から澄子さんの気の毒な生涯をきいて不幸な結婚の恐しさを知った。

澄子さんは実業家の裕福な家庭に三人姉妹の長女として大切に育てられた人だ。美しくそしてよくできた彼女は花嫁修業が終るとすぐ世の中の苦勞も知らないままに親の選んだ旧家に嫁がせられたのだ。若かった彼女は幸せを胸一ぱいにつつんでいったのだが、その幸せは結婚の翌日から無残にも破られていった。一人息子を独占された姑のはらいせは、頭から澄子さんにぶつかっていったのだ。三人の子供の母となった後までも、つわりに苦しむ澄子さんの髪の毛をつかんで意気地がないといって押したおし、その嫁いじめは想像以上のようであった。どんな厳しい試練にも決して自分を乱さなかったというだけに死の寸前まで容貌の美しさを失ってはいなかったが、それは心から人をうたがわず、すべてを愛しぬいた美しさ

であつたのではないだろうか。

実家のお母さんが涙ながらに語っていた。

「幾度つれもどそうと努力したかわからないですよ。あの娘は一言も苦痛をもらしませんでした。古くからつかえていた女中さんの話をきくたびに私達は身も心もきられる思いでした。去年でしたか二十年ぶりに里帰りさせられたときの澄子の姿はもはや仏そのものでした。まさか癌だとは知りませんでした。どんな病気でもあれでは助かるみこみはございませんでしょう。」

「今さら何と申してもかえらぬことではございますが……」と語るお母さんのその心中は察するにあまりあるものがあつた。

どんな病気にも身心の安静を保たなければならぬのはいうまでもないが、まして胃病においては神経的疲労は恐しい毒薬である。健康な人でも経験のあることだが、仕事や家庭のいざこざなどで精神的に打撃をうけている時、全く食欲のなくなるのを覚えるであろう。そんな状態が長く続いたと仮定したら、どんなにタフな人でも半病人になつてしまうのは当然だ。胃の神経はいかに敏感な器官であるかということが知らされる。

私は人々の話をぬうように細々と舞いあがつていく線香の煙をみつめながら、苦しかったであろう結婚生活二十年間の澄子さんの途上を偲んだ。神経的な疲労からおかされていった

胃病、まさしくそのいわれのとおりなのだが、彼女は苦難の十字架を背負っていながら苦しみ苦しみを苦しみとしていなかった。

「眞実の愛に生きようとする時、何のかかわりもなく自分の身を捧げつくそうと努力するでしょう。その努力、その献身が私たちの負う十字架なのではないでしょうか」といつか私に悟すように教えてくれたが、その言葉はすでに苦難をのりこえた自分そのものの姿であったのだ。

姑が、病人の横たわっているそのそばで、

「あなたのように立派な体をしていらっしゃる方がどうして結婚なさらないのですか。あなたのお母さんと一度おはなししてみようと思っっているんですよ」と平然として次の嫁のことを考えて、目にものをいわせながらはなすその顔を、いきどおりもせず笑ってきいているその落着き。

私の方がいきどおりにわなないている格好だった。

あの献身的な努力を最後までふみにじっていく姑に対して私ばかりではない誰もが深いいきどおりを覚えたであろう。

澄子さんのお母さんは腹の底を少しもみせない人で、姑と同行している時でも一歩ひきさがっているつましい人だが、我が子を殺されたも同様のこの姑をどんなにうらんでいるこ

とかわからない。

「疲れもあるのでしょうが、娘のことを思いますと胃が重く、痛みさえ感じて参りますけれど、胃病をわずらう人は本当に気の毒ですね」そう語る表情には悲憤なおもいがぎざまれているようだった。

胃というものは確かに敏感な神経の持主である。

文化人に胃潰瘍や胃癌になる人が多いとよくきかされることであるが、ただ単に食べすぎや飲みすぎだけが胃腸を害する原因というのではなく、神経の疲労、過度な肉体的労働などによって知らない間に慢性胃病をおこしているということがよくあるのだ。

たいていの人は、胃がもたれる感じや軽度のいたみぐらいでは胃散や売薬をのんで一時をしのぐ。胃の薬と名のつくものなら、胃癌の初めにみられる病状なども、一時的に消失することが多い。そのために胃癌が初期にみのがされやすいという理由ともなっている。

悪魔は足音もなく襲ってくるのだ。

ある七十才の老人が

「わたしは遊ぶだけ遊び、飲むだけ飲んだのだからこんな病気にやられるのは当然だったんです。あきらめがつきますね。こんな年になってもまだ生きたいという欲望はありますが」といとも悠長に語っておられたが、酒もたばこのまないつつしみ深い人にも、癌は容赦な

く襲ってくるのだから本当に癌という魔ものには油断ができない。

どんな病気も苦痛をとまわらないものはないが、癌の苦しみは他の病気のそれどころではない。

胃癌の場合、ひどくなってくると、胃の症状に加えて、悪液質や転移による症状が強くなり、吐き気、嘔吐、やせる、発熱などの症状がでそい、その他、黄疸、腹に水がたまってきたり、激しい痛みなどを訴えるようになり、麻薬を注射しても容易にいたみのおさまらないことすらある。

澄子さんの場合、幸いにして手術により胃癌そのものの苦しみからはまぬがれたものの、かくれた転移は体力の衰えに乗じて卵巣をおかしていったのだ。いちはやく手術は施行されたものの衰弱のはげしい体で容易に回復はみられず、

「何度も何度も入院ばかりして……」と皮肉くる姑のいやみに堪える力を失って歯をくいしばっては涙をのんでいるのがみられた。「子供たちのためにもう少し生きたいわ」と気丈な澄子さんも遂に刀折れ矢つきたような淋しさをもらすようになって、はげます言葉もない私の心を悲しませた。

私はひとしれず澄子さんの嫁いだ佐田家の家族を憎んだ。

本来なら余生短きにしろ胃癌とたたかって一命を得た喜びを分かちあったであらうに。感

情の動物である人間の悲劇をここにまざまざとみせられて胸のいたみをおさえることが出来ない。

病人と家族関係という問題の重要さを私はもっともって考えなければいけないと思った。

ふまれても根づよくしのべ道草の

やがて花咲く春もきぬべし

詠人しらず

忍耐にも限度がある。

澄子さんには花咲く春の来るのを待つことができなかった。

「お母さん、二人の妹だけは姑のいないところにお嫁にやって下さいね」と苦しかった一生をその言葉の中に残して帰らぬ人となってしまったのだ。